

# 海鬼灯

—うみほおずき—

釘本 光

白石 拓海  
白石 凧  
白石 真波  
金子 滢  
大沢 慎  
金村 信洋  
金村 淑恵

ここ数年、映画を撮っていない映画監督  
拓海の妻。バーBOXのママ  
凧の娘。大学三年生  
北九州のタウン誌「ウチらの街」の記者  
「ウチらの街」のカメラマン  
20年前に海に転落死した、拓海と凧の旧友  
信洋の祖母

夏。夕刻。海辺。

波の音に混じって、ヴーヴーと音が聞こえる。

淑恵が、海を見ながら海鬼灯を鳴らしている。

信洋が、背後から声をかける。

信洋 何なんそれ？

淑恵 海鬼灯。  
うみほおずき

信洋 海鬼灯？  
うみほおずき

淑恵 うん。この間、夜店に出とったけ。

信洋 ふん。

淑恵 (再び海鬼灯を鳴らす)

信洋 母さんが呼びよう。「もうご飯」って。

淑恵 ・・・。(また鳴らす)

信洋 ねえて。

淑恵 (鳴らしている)

信洋 ・・・。何しよん？

淑恵 呼びよう。

信洋 あ？

淑恵 呼びよるんよ。(海を見て) あん中の人を、呼びよると。

信洋 (海に目をやる) ・・・。

波の音が高まるとともに海鬼灯の音は聞こえなくなり、入れ替わりに朝鮮民謡のような唄が聞こえてくる。

ク ヲ リー ヤ ク ヲ リー ヤ ク ウ イ シ ン プ ッ ピ  
kwari-ya kwari-ya kwishinpulpit

ユ ッ チ エ ン ン パ ル ガ ッ コ バ ダ エ ッ ン ン ハ ヤ ッ コ  
Yukchiesonun Palgako Padaesonun Hayakko

イ リ ヲ ラ ヲ イ ヤ キ ハ ン ダ  
Iri warago Iyagi handa

ト ラ オ ジ ア ン ニ ユ ン ニ エ ゲ イ ヤ キ ハ ン ダ  
Toraaji annunniege Iyagi handa

昭和60年。夏。

北九州の海辺。海を挟んで向こう側に、街が見える。

信洋、ヴーヴーと海鬼灯を鳴らしている。  
淑恵が姿を現す。これ以降、淑恵は、目の前で起こる出来事を  
じっと見つめている。  
凧が、信洋に近づいて来る。

凧 何それ？

信洋 海鬼灯。  
うみほおずき

凧 海鬼灯？ 鬼灯とは違うと？

信洋 違うよ。鬼灯は植物やろ。海鬼灯は貝の袋やけ。

凧 貝の袋？

信洋 うん。祭りとかで売りようやん。

凧 そうやっけ。

信洋 赤とか青とか黄色とか、色付けられて、鳴らしよううちに口ん中真っ赤  
になったり。ばあちゃんが、よう買ってくれよった。

凧 ごめん。

信洋 何であやまるん？

凧 亡くなってまだ間がないんに、なんか・・・

信洋 凧が落ちこんでどうするんか。

凧 あ、うん・・・

信洋 知っとう？ 何でお盆に鬼灯を飾るか。

凧 ほおずきっち、植物の？

信洋 そう。だいたい色の。

凧 うん・・・知らん。

信洋 ほおずきは、盆提灯の役目をしとるんて。

凧 盆提灯。

信洋 うん。亡くなった人の魂が、お盆に、迷わず、ちゃんと縁ゆかりがある人のと

ころに戻れますようにっち。

凧 へー

信洋 鬼灯りやけんな。

凧 おにあかり？

信洋 ほおずきっち、漢字で書いたら鬼灯りっち書くやん。もう死んどう人の  
灯りやけん。

凧 知らんかった。

信洋 俺らの方だけの言い伝えかもしれんけど。

凧 あ、私、そーゆーの疎いけん・・・

信洋 俺さ。

風 くん？  
信洋 別に、ばあちゃんのことすっごくいい好きってワケでもなかったんにき…。  
風 そうなん？

信洋 むしろ好かんかったかも。家におった頃は、ばあちゃんの部屋っちなんか暗いカンジやったし、かび臭いっちゅうか・なんちゅうの、サロンの匂いみたいなんとかもき、して、あんまり近寄らんかったし。話しよってもおんなじ話が長いでから面倒臭いしね。  
風 でもさ、家帰ったらいつもおばあちゃんがおってくれたんやろ。家の鍵とか自分で開けたことないっついよったやん。

信洋 ああ。  
風 私、じいちゃんもばあちゃんも昔に亡くなっとなんか記憶にないし、親は共働きで、家の鍵はいつつも私が閉めて私が開けてやし。やけん家にばあちゃんがおるっちなんかうらやましかったけどね。  
信洋 へえ。

風 何。  
信洋 残念やったね。

風 何が。  
信洋 いや、ばあちゃん。

風 あ？  
信洋 風やったらさ、もつとばあちゃん孝行できたかもしれんのに。  
風 何それ。

信洋 なんか・苦手やったんよね。うん、間違いない苦手やった…頭さ、あ？  
信洋 撫でるんよ。皺くちやの手でこう・ぐしやぐしやっち。髪ぐちやぐちやになるやん。なんか・うっとおしいでからさ。

風 いいやん、どうせぐしやぐしやなんやけ。  
信洋 なんかさそれ…入院してからはさ、ばあちゃんのお見舞い行くっちゅうだけで何か消毒薬の匂い思い出して、何か行く気せんかったし。無理に連れて行かれても、俺だけすぐ帰りよったしね。  
風 ふうん。

信洋 俺が行くと必ずお菓子くれるんやけどさ、それが嫌でさ。  
風 何で？

信洋 ぐっしやぐしやのちり紙に包んでくれるんよ。アメ玉一個とか、せんべい一枚とか。そんなんいつ買ったもんかもわからんしさ、病院でもらっても何か汚いカンジがして。もらってもすぐポケットに突っ込んで、帰ってすぐ捨てよった。

風 ……  
信洋 食べればよかったのかな。

風 あ？  
信洋 もらったたら、ばあちゃんの前で、すぐ食べればよかったのかな、お菓子。

風 ……うん…。  
信洋 ……（海鬼灯を鳴らす）  
風 なんか…。

信洋 あ？  
風 変な音。

信洋 そうかね。  
風 うん。

信洋 鳴らしてみる？  
風 鳴らしきらんもん。

信洋 やったことないんやろ。  
風 そうやけど。鬼灯も鳴らしきらんもん。

信洋 鬼灯よりは簡単やけ。（自分の口に含んでいた海鬼灯を風の口に啣えさせる）

風 ……（海鬼灯を啣えたまま信洋に背を向ける）  
信洋 ……（見ている）

風 （鳴らしてみるが音は出ず、海鬼灯を口から取り出す）やっぱ鳴らしきらん。

信洋 （笑う）  
風 バカにしてから。

信洋 しとらんよ。  
風 やけん鳴らしきらんつち言ったんに、すかん。

信洋 （笑う。風から海鬼灯を受け取り、自分の口に入れる）  
風 あ…。

信洋 （海鬼灯を鳴らす）  
風 ……なんか…しゃべりよるみたい。

信洋 ……しゃべりよるんやろ。  
風 ？  
信洋 ……しゃべりよるんよ、これ。（海鬼灯を鳴らす）

溶暗とともに海鬼灯の音も消える。